

GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]

PEACE BOAT

2019

Spring

多彩な魅力イベリア半島
スペイン・ポルトガル

極上のリゾート地

第二特集

奇跡の楽園タヒチ

[バペーテ・ボラボラ島]

【発行】(株)ジャパングレイス



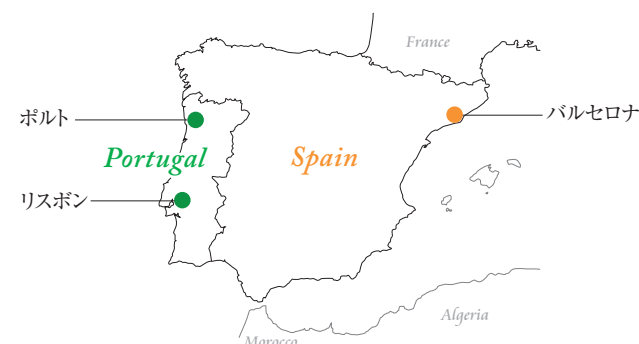
Spain

Portugal

芸術、歴史、美食を楽しむ

スペイン・ポルトガル

ヨーロッパ大陸の西端にあり、ジブラルタル海峡をはさんでアフリカ大陸と向かい合っているのが、イベリア半島である。ヨーロッパ第二の半島でその約8割をスペインが、2割をポルトガルが占める。紀元前からの歴史においてさまざまな民族が居住し、多様な文化が育まれ、美食家をうならせるグルメも多い。気候も温暖で過ごしやすく、楽しみがいっぱいの寄港地だ。



CONTENTS

特集

芸術、歴史、美食を楽しむ

スペイン・ポルトガル

スペイン〔バルセロナ〕

― ガウディが遺した建築物…………… P4

― 「中世」がそのまま残り重みを感じさせる街…… P6

― ポルトガル〔リスボン〕…………… P8

― ポルトガル〔ポルト〕…………… P10

― 新しいワインとの出会い…………… P11

― 地球一周の船旅で英会話を学ぶ〔GET〕…… P12

第二特集

極上のリゾート地

奇跡の楽園タヒチ

― パペーテ…………… P14

― ボラボラ島…………… P16

― PEACE BOAT NEWS…………… P18



Ocean Dream

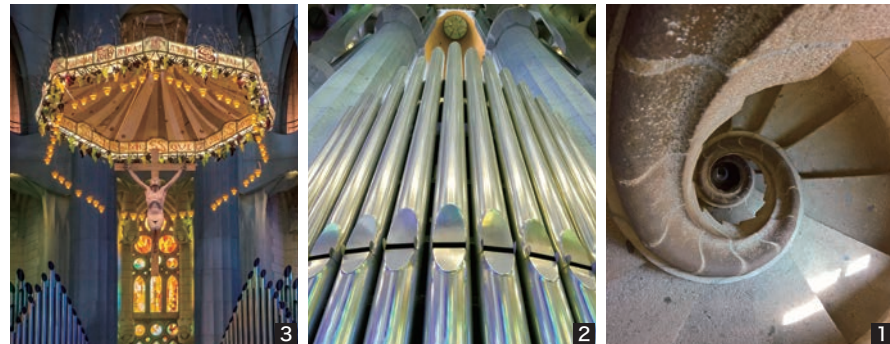
ポルトガル・ポルト港停泊中のオーシャンドリーム号

表紙の写真

バルセロナのサグラダ・ファミリア。世界一周で度々訪れる人気の訪問地。



1:塔から降りるときに使う、巻貝をイメージしたらせん階段。2:定期的に美しい音色を響かせるパイプオルガン。3:主祭壇のキリスト像、黄金色の天蓋には細かい装飾がなされている。



バルセロナを中心とするカタロニア地方では、19世紀に産業革命を成し遂げた経済発展とともにモデルニスモ（近代主義）と呼ばれる芸術的な復権運動が起こった。それは特に建築分野で目立ち、スポンサーとなったブルジョワの支援によって一大ムーブメントになる。

アントニ・ガウディは、そんな富豪の一人、エウゼビ・グエルによって見出された。1878年、当時まだ駆け出しの建築家であったガウディは、パリ万博覧会に出展していた手袋のショーケースをグエルに高く評価され、以後支援を受けることになる。

ガウディの代名詞になっているのがカトリックの教会堂「サグラダ・ファミリア」。バルセロナ一番の観光スポットとして世界各国から観光客が押し寄せる。1883年に31歳で主任建築家に就任したガウディがライフワークとして取り組

んだ未完の傑作だが、近年工期短縮により2026年に完成予定であることが発表された。唯一無二のデザインに緻密な彫刻、装飾がほどこされたファサード（建物正面）、神秘的な聖堂内部など、見る者はその壮大さと荘厳さに圧倒される。ほかにも市内ではガウディ作品をいくつも見る事ができる。グラシア通りに面して建つ邸宅「カサ・ミラ」も代表作の一つ。地中海をイメージしたとされる曲線状に波を打っている外観が特徴でバルコニーの装飾も一つひとつ異なっている。すぐ近くにある「カサ・パトリヨ」もぜひ訪ねたい。骸骨をモチーフにしたバルコニー、カラフルなタイルで装飾された外観など見どころは多い。市内中心部から少し離れたところにある「グエル公園」のほか、「グエル邸」「カサ・ベセスス」「レイアール広場の街灯」などを巡りながら、独創的なガウディの世界に浸ろう。



聖堂内部は巨大な樹木を表した独創的なデザインで幻想的な世界へ引き込まれる。



4: ガウディが初期に手がけた建築物で、タイル製造業者の家であったため多数のタイルが用いられている「カサ・ベセスス」。5: 「世界遺産のマンション」としても知られ現在も入居者がいる「カサ・ミラ」。6: 1877年に建てられ、出窓の柱の様子から「骨の家」ともいわれている。ユニークな屋上の煙突も必見の「カサ・パトリヨ」。

Antoni Plàcid Guillem Gaudí i Cornet

スペインが誇る天才建築家

ガウディが遺した建築物

古代ローマ建築にはじまり、スペインは世界に名だたる建築物が多い。そのなかで19世紀末から20世紀初頭にかけてバルセロナを中心に発展した芸術様式、モデルニスモの代表的な建築家の一人がアントニ・ガウディだ。稀代の天才が遺した建築物はバルセロナの「顔」として生き続けている。

「中世」がそのまま残り重みを感じさせる街

ヨーロッパでも屈指の人気都市バルセロナには、観光名所が数多くある。なかでも有名な見どころが揃っているのが、ローマ時代に築かれたゴシック地区と呼ばれる旧市街だ。このエリアのシンボルと言えるのがバルセロナ最高位の教会である「サンタ・エウラリア大聖堂」。現地の人のとって特別な存在で、ゴシック形式の入口の前に立つだけで歴史の重みが迫ってくる。

いつも観光客で賑わっているバルセロナの繁華街「ランブラス通り」にはカフェやレストラン、土産物屋のほか絵描きや大道芸人もいて、散策するだけでわくわくさせてくれる。歩き疲れてひと休みするなら、修道院を改装した「レイアール広

場」がおすすすめ。ガウディが手がけたガス灯もある。

旧市街は中世の雰囲気ただよふ街並で、風情のある細い路地を歩くのも楽しみの一つだが、入り組んでいるので迷わないようにご注意ください。そんな路地の一角にあるのが「ピカソ美術館」。多作で知られるピカソは10代をバルセロナで過ごし、その「青の時代」の作品から晩年まで作風の変化を鑑賞できる。美術好きならモンジュイックの丘にある「ミロ美術館」にも足を伸ばしたい。ピカソと並ぶスペインの世界的画家ジョアン・ミロが作った美術館で、見る者をなごませる彼の独特の作品約1万点を中心に展示されている。またモンジュイックの丘

からはバルセロナ市内を一望する景色も楽しめる。

このほかバルセロナ近郊の、パワースポットとしても知られるモンセラットへのオプショナルツアーがある。モンセラットはスペイン語で「のこぎり山」を意味し、「ごつごつとした奇妙な岩山を削って建物が建てられている。標高1200メートルを超える山頂からの雄大な景色は多くの観光客を惹きつけている。中腹にある「サンタ・マリア・モンセラット修道院付属大聖堂」には黒いマリア像が安置され、キリスト教の聖地として信仰を集めている。また大聖堂前の中庭で瞑想すると不思議な力が宿るといいう言い伝えがある。



Barcelona Goods

細かいところまでリアルなフラメンコの置物。

雑貨店などで見かけるカラフルなマグカップ。



オリーブオイルのコスメも充実。石鹸の種類も豊富。

名所、名産をモチーフにしたキーホルダー。



お土産で人気のFCバルセロナグッズ。

1: カタルーニャ広場からコロンプスの塔まで続く「ランブラス通り」。2: ゴシック地区にあるバルセロナで最も格式の高い「サンタ・エウラリア大聖堂」。3: 14世紀の貴族の館を利用している「ピカソ美術館」。4: カタルーニャの聖地といわれる「モンセラット」。5: 観光客にはフラメンコショーも人気。

本場の「バル」で、ワイン片手にタパスに舌つづみ



スペイン料理は和食に慣れた人の味覚に合うものが多い。美食の街バルセロナで、ぜひ本場の味を堪能したい。まず思い浮かぶのが日本でも馴染みの深いパエリアだ。地中海の新鮮な魚介を使ったパエリアは至福の時をもたらしてくれるに違いない。イカやエビを肉類と煮込んだカタルーニャの定番料理をはじめ、郷土料理もぜひ味わってみたい。またスペインを訪れたら、入ってみたいのが「バル」。生ハムやアヒージョ、オムレツをはじめ「タパス」と呼ばれる小皿料理はどれもグレイドが高い。ビール、ワインも格別の美味しさだ。観光の合い間に小腹が空いたり、のどが渇いたら気軽にバルのドアを開けよう。カジュアルな雰囲気なので店内で現地の人と交流が生まれることも少なくない。



9: 一見パエリアのようだがパスタを使っている「フィデウア」。10: 定番ともいえる地中海のムール貝は絶品。11: イベリコ豚を用いたものから生ハムの種類は豊富。12: 多くのバルで見かけるイワシのオリーブ漬け。13: トーストしたパンにトマトを塗る「パン・コントマテ」。



6: 街のいたるところにバルがあり、人気店には行列もできる。7: 気軽に入って思い思いのスタイルで楽しめるのがバルの魅力。8: 食材を串に刺してつまんで食べるのが「ピンチョス」。





2



3

1: テージョ川に面した「テルメシオ広場」は震災前に宮殿があった。2: 高さ52メートルの巨大な「発見のモニュメント」。3: ポルトガルの栄光を伝える大寺院「ジェロニモス修道院」。



1

Lisbon Food & Goods

リスボン名物のイワシの塩焼き。



リスボンでよく食べられているタラの料理。

エッグタルト「バシュテル・デ・ナッタ」は国民のおやつ。



「魚の街」らしい、可愛い魚のマグネット。

幸せのシンボル雄鶏「ガロ」の置物。



5

ヨーロッパ最西端の「ロカ岬」。



4

ポルトガル王家が住んでいた「シントラの王宮」。

大航海時代の面影が残る7つの丘の街

旧市街アルファマ地区は、石畳をトラム（路面電車）が走り、なつかしく落ち着いた雰囲気がある。古代ローマ時代に建設された「サンジョルジェ城」へ上れば街並みを一望できる。隣のバイシャ地区には「コルメシオ広場」があり、ここからトラムに乗ってベレン地区へ向かうのもいい。ベレンは大航海時代にゆかりの深い世界遺産地区で、ヴァスコダガマのインド航路発見を記念して建設された「ジェロニモス修道院」、河口の要塞でマヌエル様式を代表する建築「ベレンの塔」などは必見だ。またテージョ川岬にある、エンリケ航海王子をはじめ大航海時代に活躍した偉人たちを称えた「発見のモニュメント」も迫力があり見応え十分だ。

リスボンから日帰りで行ける、かつての王室の避暑地「シントラ」。8世紀頃にムーア人によって造られた城がこの街のはじまりといわれ、12世紀以後、王侯貴族の屋敷が多く建ち世界遺産に登録されている。「シントラ宮殿」では豪華で美しい建築様式の部屋を見学できる。保存状態も良く、長い期間、王家に愛された宮殿の歴史が迫ってくるようだ。シントラと並びリスボン近郊ツアーとして人気なのがヨーロッパ最西端の「ロカ岬」。太陽が最後に沈む最西端の地には、詩人カモンイスによる一節「ここに地終わり、海始まる」と記された碑が建っていて、ここが「地の果て」といわれる理由を実感できる。

テージョ川の河畔に広がるリスボンは、丘に囲まれ「7つの丘の街」とも呼ばれている。古い歴史をもつが、特に大航海時代にいち早く世界へ船出したことで知られ、喜望峰やインド航路を「発見」し海洋帝国を築いていった。隆盛を誇ったこの時代に建造された建築物は今も残され往時をしのばせる。1755年の大震災で打撃を受けるが、その後洗練した街づくりが進み、震災を逃れた中世以前の古き良き雰囲気と絶妙なバランスを生んだ。こじんまりとした街だが活気にあふれ、観光スポットも数多い。



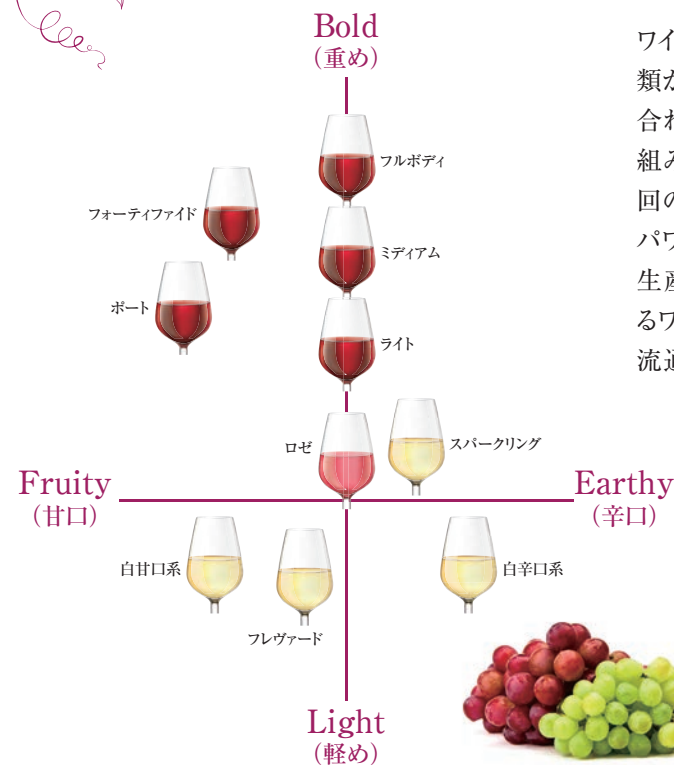
リスボン

Lisbon

ポルトガルの首都リスボンは西ヨーロッパ最古の都市。その美しさは古くから多くの人を魅了し、現在も世界中から観光客が訪れている。



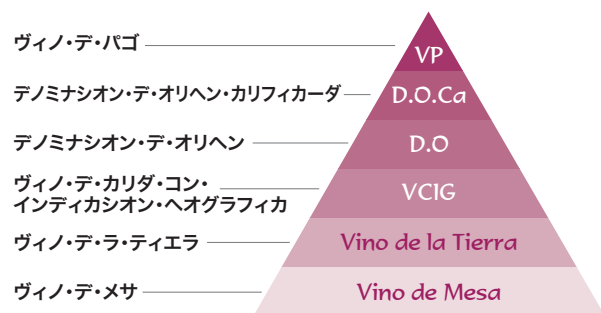
新しいワインとの出会い



ワインはブドウの品種や製造方法の数だけ種類があり味わいもさまざま。「色」「重さ」などで合わせるのが基本といわれるが、自分なりの組み合わせで相性を探るのもいいだろう。今回の寄港地のスペイン、ポルトガルはヨーロッパワインの代表格で、アメリカやチリなど新興生産国と比べて「旧世界」といわれる歴史あるワインを生み出している。日本ではなかなか流通していないワインとの出会いも楽しみだ。



❖ スペインワインの格付け



ワインの生産がさかんな国々には、品質を厳格に守っていくためワイン法による格付け制度がある。たとえばワイン造りの歴史が古いスペインでも左図のような6つのカテゴリーに分類されている。お土産にはラベルに「D.O.」や「D.O.Ca.」と印字されているものがおすすめだが、非常に種類が多いので、格付けにこだわらずに自分の味覚にあったものを選ぶのもいい。
※ワインの格付け表示は国によって異なる。

❖ ラベルの読み方



※ブドウの品種が書かれているものもある。



「波へい」でも楽しめます
洋上居酒屋「波へい」では寄港地にて直接仕入れたワインを取り揃え、和食とワインの絶妙な組み合わせを堪能できる。



Portugal



ポルト

Porto

ローマ時代に貿易で栄えた港町で、ポルトガルという国の名の由来になった「ポルト」。歴史的な遺産が残る必見スポットも目白押しだ。

歴史の情緒あふれる美しい港町

「ポルト」の旧市街地は世界遺産に登録され歴史的建造物が多い。13世紀に建造された「ポルト大聖堂」やポルトの中心駅である「サン・ベント駅」では青いタイルのアズレージョの装飾も見ることができ。ゴシック様式の「サン・フランシスコ教会」は、天井や壁の彫刻が金泥細工でおおわれた美しい内装も必見だ。このエリアには世界一美しい本屋と評される見事な内装、設計の「レロ書店」があるので入ってみるのもいい。ただし入場料が必要になるのでご注意ください。お土産を買うなら、ポルト随一のショッピング通り「サンタ・カタリーナ通り」がおすすめ。ひと休



1:ドロー川から旧市街地のカラフルな家並みを望む。2:ドロー川の散策エリア「カイス・ダ・リベラ」。3:ポルトのシンボル「ドン・ルイス一世橋」。4:ポルトワインの積出港と知られる。



アズレージョで覆われた礼拝堂「アルマス教会」。

Porto Food & Goods



郷土料理「フランセジーニャ」はボリューム満点のサンドイッチ。

独特の甘みとコクが人気のポルトワイン。



みするに最適なカフェも多い。ドロー川をはさんだ対岸のエリアにもぜひ足を運びたい。本場ポルトワインのワイナリー、ワインセラーがあり見学のほか試飲を楽しむこともできる。ここでしか手に入らないポルトワインをお土産にするのも素敵だ。
川沿いを散策すると、巨大なアーチが目印のポルトのシンボル「ドン・ルイス二世橋」が見えてくる。上下層の2階建て構造で上層は395メートルあり、実に壮観だ。また南側の丘にカラフルな建物が並んでいるのが見渡せる。それはまるで映画のワンシーンのような美しい光景だ。

経験豊かな先生たち

ハナ・ジョンズ

落ち着いた環境で学んだことを洋上生活のなかで練習する機会もたくさんあります。地球を一周しながらのGETプログラム体験は、皆さんの人生においてかけがえのないものになること間違いなしです！



オンドレー・ホルネス

日本にいるとなかなか実感できませんが、世界ではさまざまな種類の英語が使われています。3ヶ月という期間で世界各国の人たちと英語でふれあう体験はGETプログラムならではのものです。



ガブリエラ・テジヨ

スペイン語ビギナーだった生徒さんも、数回のレッスンでスペイン語圏の寄港地で買い物したり友だちをつくったりすることができました。語学を身につけるとコミュニケーションの楽しさが広がります。



参加者の感想



川嶋佳子さん
(乗船時29歳)

洋上は、学びと実践の連続でした。昨日学んだ単語や表現

が自然と口から飛び出していることがしょっちゅうあり、毎日新しい自分に出会っているようで、新鮮でした。出航前には想像できませんでした。GETで学んだ英語を使って、クルーや寄港地で現地の人とふれあいながら、世界中に友だちができました。自分でも驚くほど英語の上達を感じることができ、また多才な先生たちと一緒に旅をしながら、英語を通じて、世界と、自然と、人とのつながりを学ぶ感覚が大好きです！



直津 健さん
(乗船時59歳)

アツプアツプしながら始めたGETでの英語学習。クラスの

レベルについていけずに、クラスを變更して頑張りましたが、なかなか思うように話せませんでした。しかし旅の後半に、エクアドルのイグアナ公園で出会った少年からキーホルダーをもらったエピソードでスピーチコンテスト審査員賞を受賞したことをきっかけに、英語で伝える面白さにすっかりはまりました。帰国後も東京でGETを受講しています。「世界はおもしろい」と実感した地球一周の船旅の夢は、今でも広がり続けています。



1:「生徒が話す」ことを基本にしたプログラム。2:少人数制でアットホームな雰囲気のレッスン。3:イベントやワークショップも定期的開催。

地球一周の船旅で英会話を学ぶ



クルーズ生活にはさまざまな楽しみがあるが、地球一周の船旅では「GET (Global English/Español Training) プログラム」という語学レッスンも提供している。船の上で楽しく英会話やスペイン語会話を学習し、船内や寄港地で実践できる点が大きな魅力。毎回多くの参加者が受講している人気プログラムだ。

「学ぶ⇄便り」の繰り返しで上達する 洋上プログラム

English & Spanish

「話したい」ことを「話せる」ようにする

3ヶ月のクルーズ生活は、語学レッスンに最適の環境だ。GETは英語とスペイン語の少人数コースとマンツーマンコースを用意。3ヶ月の集中プログラムでは、参加者が話したいことを話せるようになるためのオーダーメイドのカリキュラムを組む。たとえば、「寄港地での買い物や万一のトラブルの際に対応できる英会話」という要望があれば、それに応える内容で行われる。そのために経験豊富な先生たちが揃っていることも特徴だ。プログラムをコーディネートするGETスタッフによると「参加者は10代から90代まで幅広く、語学能力も入門レベルから上級レベルまでさまざまですが、一人ひとりの目的にふさわしいクラスとカリキュラムで、毎回楽しく学べます」と語る。

学んだ言語を船内ではクルーや海外ゲストを相手に実践し、寄港地では現地のひととのふれあいで活用できる。「GETでは『生徒が話す』ということを重視しています。学んだことはすぐに使い、使う中で生まれた学びを次に活かすというサイクルが上達に導きます。クルーズを通して継続することによる実力アップを実感してもらえは、必ずです」(GETスタッフ)。またレッスン以外にも任意参加のアクティビティーやワークショップ、寄港地での語学ツアーが用意されているので、常にモチベーションが高まるという。「英語はコミュニケーションのツール。コミュニケーション能力を上げて船旅を充実させるため、ぜひGETにご参加ください」(同)。

地球一周の船旅は、外国語を使う機会にあふれている。



互いに文化の異なる人間同士を近づけるのが言語というツール。

語学ツアーで生まれる交流。

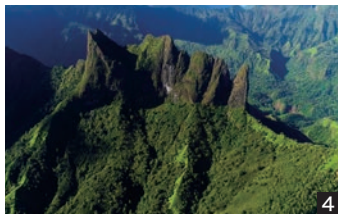




2



3



4

1:おしゃれな店が連なるパペーテの街並み。
2:モーレア島へはフェリーや高速艇で渡る。
3:タヒチの台所であるマルシェ。4:標高
2200メートルを超えるオロヘナ山。



1

タヒチ観光の拠点となる南国の都市

パペーテは港を中心に形成されていて、近代的な街並みとともに南国の雰囲気をつたよわせている椰子の木やカラフルな色合いのショップが軒を連ねる。ポマレ大通りをはじめ多くの車が道行くパペーテは「南国の都市」である。

で揃う。規模の大きな「バイマシヨッピンクセンター」に足を伸ばせば、民族衣裳のパレオや黒真珠店などの専門店がありタヒチならではの土産を買い求めることができる。またグルメも充実し、モダンなカフェやレストランも多く、本格的なフランス料理から中華、イタリアン、ベトナム、郷土料理まで各国の料理を楽しめる。タヒチの人々が愛する、ライトラガーな味わいが特徴の地ビール「ヒナノビール」

も食事のお供におすすめ。

パペーテから1時間ほどのタラバオという街にピリスポートと馴染みが深い、ガブリエル・テティアラヒさん(通称「ガビ」)がいる。農家であり活動家であるガビさんは20年以上ピリスポートの友人として何度も乗船してくれている。反核運動、タヒチでの独立運動、先住民族の自立支援などの活動を行っているガビさんは、船上での講演のほか、自らの農園に参加者を受け入れ自然に敬意を払う大切さなどを教えてくれる。そんなガビさんとの交流を楽しみにしたい。



反核・先住民族人権活動家
ガブリエル・テティアラヒさん
NGO「ヒティ・タウ」創設者。先住民族マオヒのアイデンティティ回復と「仏領」ポリネシアの独立を目指している。またタヒチの反核運動のリーダーとしてマオヒの経済的、社会的自立を支援している。

Papeete Food & Goods



タヒチの郷土料理であるココナツミルク風味のマグロ料理。



タヒチの地ビール「ヒナノビール」。



民族衣裳のパレオも土産物屋で手に入る。



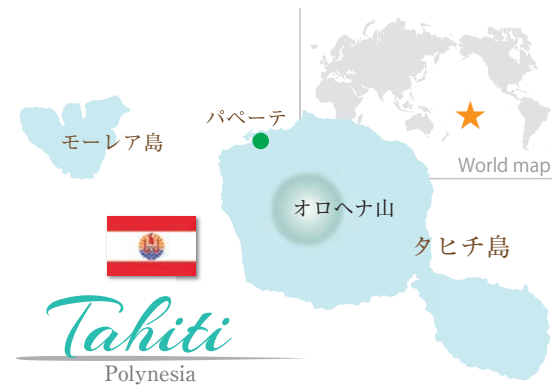
Papeete

タヒチの中心として活気に満ちる「パペーテ」

タヒチ島のとなりの モーレア島の美しい海。



南太平洋に浮かぶ常夏のリゾート地タヒチ。観光地として世界でもトップクラスの人気を誇る楽園だ。フランス印象派の画家ゴーギャンが愛し、晩年を過ごしたことも知られている。タヒチ島の全周囲は約180キロあり、紺碧の海はもろろん緑深い山や熱帯植物が茂る谷など豊かな自然に恵まれている。タヒチにおける行政や商業の中心地である首都パペーテは、都会らしい活気に満ちている。歩いて回れるほどのコンパクトな首都だが、フランス領ポリネシアである背景からフランス文化と島の魅力が溶け合っており、お洒落な雰囲気もどかな南国ムード両方の魅力をあわせもっている。解放感たっぷりリゾートタイムを満喫したい。



世界で最も美しいといわれる島「ボラボラ島」

タヒチといえばボラボラ島を思い浮かべる人が多いように、南の島の代名詞にもなっている。船で島へ近づくと、美しい緑に覆われたオテマヌ山が出迎えてくれる。

ボラボラ島の周囲は約30キロで、ぐるりとサンゴ礁が囲み、ラグーンが延々と続いていく。古代ポリネシアの神が創造したという伝説があるのも、うなずける美しさだ。透明度の高い海はサンゴだけでなく優雅に泳ぐカラフルな熱帯魚たちの姿もとらえることができる。ウミガメの泳ぐ姿にいやされ、運が良ければマンタに出会うこともできる。どこのビーチも思わず声を上げてしまうほどの透明感だが、特に南端のマティラビーチはパラダイスという表現がふさわしい、リゾート気分満点の絶景が広がるポイントだ。

島で一番大きな村であるヴァイタペ村にはカフェやお土産屋などが並び、休憩や買い物にオススメ。またボラボラ島では海の美しさだけではない魅力も感じて欲しい。豊かな緑も観光客を惹き付ける理由になっている。島の中から堂々とそびえるオテマヌ山のふもとを散策すれば、ゴーギャンも愛した神秘的な風景が広がり、大自然のシャワーを浴びながらリラックスできる。



ボラボラ島へ上陸するためのテンダーボート。



島の南端に位置するマティラビーチは息を呑むほどの美しさ。



水上バンガローがリゾート感を演出。



BoraBora

タヒチ島から北西に250キロの海上にあり「太平洋の真珠」といわれるほどの美しさを誇る「ボラボラ島」。島の周りを取り巻く真っ白なビーチ、サンゴが生むグラデーション、青々とした海に惹かれ多くの観光客が訪れる。

美しいラグーンに囲まれたボラボラ島の全景。



2



1



4



3

1:島全体が目りょう然の案内ボード。2:地元ミュージシャンの出迎え。3:港に停泊する観光用のカヌー。4:神秘性をたたえるオテマヌ山には太古からの自然が残る。

BoraBora Goods



南国らしい人形の置物。



ココナッツにティアレの花を漬込んだ「モノオイル」。

電気がない地域の人々に照明を届ける

「ボヤージ・オブ・ライト」活動報告

第100回クルーズでフィリピンのNGO「Litter of Light（リッター・オブ・ライト）」と共同した、新しいプロジェクト「Voyage of Light（ボヤージ・オブ・ライト）」が始動した。これは電気がない地域に、太陽光エネルギーを使った持続可能な照明システムを提供する活動で、今クルーズでは20カ国中、8ヶ国で約500個のライトとその作り方などの知識を届けてきた。

ピースボートとリッター・オブ・ライトの出会いはおおよそ2年前。国連が掲げる「持続可能な開発目標（SDGs）」の達成に向けた取り組みを紹介するためにアブダビを訪問していたときだった。そこからお互いの活動を認め共感し合い、「将来、

パートナーシップのもと一緒に何かやりましょう」と話し合ったことがきっかけだった。

リッター・オブ・ライトはフィリピンで2011年に創設されたNGOで、ペットボトル廃材やLEDライト、バッテリーといった比較的手に入



マダガスカルにおけるワークショップの様子。



照明は子どもでも簡単に作ることができる。



ボヤージ・オブ・ライト活動報告会において。



明りのなかった夜に照明が灯る。

もらえた。結果として今クルーズでは20カ国中、8ヶ国で約500個の照明を届けることができた。

今年3月に行われたボヤージ・オブ・ライト活動報告会で、イラク氏は次のように挨拶した。「ピースボートは私たちの最良のパートナーで、次の寄港地を訪れるまで船のなかの皆さんと一緒に準備を進めることができました。力を合わせ大きなプロジェクトを成し遂げました。またピースボートが長い年月をかけて育ててきた世界中のネットワークのおかげで私たちの活動もスムーズにより深く理解してもらうことができました」。



リッター・オブ・ライト代表のイラク氏。

ボヤージ・オブ・ライトは、今後もピースボートの活動の「環」として定期的に実施していく予定だ。「講座を開き、ワークショップを実施し、照明を寄付する」というスタイルで、まだ電気がない地域の、より多くの家に「光」を届けていく。

りやすい材料と太陽光を活用した持続可能なライトを世界中に届けてきた。これまで世界中約100万戸の家や道を照らしてきたが、世界にはまだまだ電気がない地域は多く、不自由な暮らしを強いられている人々は多い。そこでこの活動を、ピースボートの記念すべき第100回クルーズにおいて新プロジェクト「ボヤージ・オブ・ライト」として推進していく企画が立ち上がり、2年前の約束が実現した。

クルーズにはピースボートとリッター・オブ・ライトの代表イラク氏を含めたスタッフが乗船し、船内でエネルギー問題に関する講座を開き、照明作りのワークショップを開催した。乗船者の関心も高く、毎回大勢の参加者から取り組みへの賛同を得ることができた。



船内におけるワークショップの様子。

寄港先にはあらかじめピースボート事務局が諸団体へ連絡を入れ、関心のある団体を通して参加者を

募った。学生中心の団体もあり、また寄港先から提供先の現地へ向かいワークショップを開催したケースもあった。今回はフィリピンの家庭で一般的に使用されるランタンの廃品を活用して照明を作り、同時に修理方法などの知識も伝授し、太陽光エネルギーで持続可能な照明を提供した。いずれも夜明りが点いて「宿題ができるようになった」「危険だった夜道を安心して歩けるようになった」など、皆さんにとっても喜んで

ウルグアイ副大統領 ルシア・トポランスキーさん訪船

2019年2月に寄港した南米ウルグアイのモンテビデオにおいて、ピースボートの寄港を歓迎し、ルシア・トポランスキー副大統領がオーシャンドリーム号に來船した。

船内ではまずピースボートの、国連の持続可能な開発目標（SDGs）への取り組み、核廃絶を訴えるICANの活動、被爆証言を世界に届ける『おりづるプロジェクト』などを紹介した。

おりづるプロジェクトを代表して渡辺淳子さんによる証言会も行い「私はまだ幸運にも生きています。世界にあのような悲劇が繰り返されぬよう、そして核のない世界のために証言を続けていきます」と涙ながらに訴え、トポランスキー氏が優しく抱きしめる場面もあった。



乗船者向けにスピーチ。

乗船者に向けて行ったスピーチでトポランスキー氏は、平和と持続可能性を追求す



來船したトポランスキー氏を出迎える。

るウルグアイの取り組みを紹介し、ベネズエラの現状に対する非軍事的で平和的な調停についても言及した。また自然資源が豊かなウルグアイ国内における再生可能エネルギーの拡大についても強調した。

「こんなに多くの方が船旅を共にし、世界中に平和のメッセージを届けているのは素晴らしいことです。ウルグアイの人々を代表し皆さんの訪問に感謝します」という言葉に、会場は大きな拍手が湧き起こり温かい雰囲気包まれ、ピースボートの船旅の意義を改めて味わう機会になった。



船上百景 [洋上バーベキュー]



洋上バーベキューは新しい友人ができる機会でもあり、毎回多くの参加者でにぎわう。

料理も会話も格別 旅仲間ととびきりのひとときを

世界一周のクルーズにおいて、船内ではさまざまなイベントが企画されるが、参加者がワイワイと陽気に楽しめるのが洋上バーベキュー。友人同士はもちろん、船内で知り合いになった旅仲間などで声を掛け合い、毎回大勢の参加がある。デッキにバーベキューセットが用意され、お肉やシーフード、野菜などが次から次へという香りとともに焼けていく。

焼き上がりを待つ間、デッキチェアでくつろぎ海風がそよぐなか、これまでの寄港地の思い出を振り返ってみる。またこれからの寄港地への期待を友人たちと語りあう。見渡す限りの大海原で口にする美味しいビールと焼きたての食材は、参加したみんなのお腹と心を満たしてくれる。

洋上バーベキューは毎回大好評。美味しいものを食べるだけでなく、仲間との思い出づくりとして大切なひとときになっている。



開放感のなかで食欲も刺激される。



毎回、豪華な食材が用意される。



「大きな船はいつも、私たちの島に悪いものを持ち込んできた。鉄砲だったり疫病だったり。あるいは私たちの島からいろんなものを持ち去っていった——」これは、今号でも紹介しているタヒチに暮らす水先案内人ガビさんの言葉です。スペインやポルトガルを中心に15世紀半ばより始まった『大航海時代』以降の歴史を指していると思われる。ヨーロッパからの視点では、遠い海の方こうの大陸や島々を「発見」と言いますが、その地に暮らす人びとにとっては辛く悲しい歴史の「始まり」とも言えます。

しかし、ガビさんの言葉には続きがあります。「あなたたちピースボートは、はじめて大きな船で“平和”を運んできた。しかも何も持っていないが、“幸せ”を置いていくてくれた——」。

船というのは移動の他に、さまざまなモノを運ぶことができるのが特徴です。ぜひ皆さんもご乗船時には、笑顔、幸せ、平和な心を世界中の港にお届けください。そうすることで、数百年後の人々から、『平和大航海時代』は20世紀後半から始まった——と言われるかもしれません。(N.I.)